

アパートの管理人さんは、俺の部屋でだけ甘えてくる――世話焼きな年上の管理人さんと、ひとつ屋根の下で芽生える恋――

面倒見のいい年上の管理人さん。世話を焼くうちに縮まる距離。誰にも甘えなかった人が、年下の住人にだけ崩れていく純愛

夜更け文庫／夜野しずく

本作品はフィクションです。登場人物はすべて18歳以上の成人であり、実在の人物・団体とは一切関係ありません。

プロローグ

つばき^そ荘の住人は、みんな白石千鶴^{しらいちづる}を「頼れる管理人さん」だと言う。

築三十年の古いアパート。その一階の管理人室にいつもいて、住人の誰が困っても、エプロン姿で飛んでくる、面倒見のいい年上のお姉さん。

——その人が今、俺の部屋で、まるで別人みたいに息を乱している。

夜のところが、六畳一間の隅々まで満ちていた。枕もとのスタンドの、ほのかな橙^{だいだい}だけが点って、カーテンの向こうでは、外灯の灯りが古い窓ガラスに淡くにじんんでいる。同じ屋根の下——廊下を抜けて階段を下りた先の、一階の管理人室。その十数歩しか離れていない場所に、彼女の「管理人さん」としての生活があることが、今はひどく遠いことのように思えた。

昼間の千鶴を思い浮かべる。共用廊下を箒で掃きながら、行き交う住人ひとりひとりに「おはようございます」と声をかける。郵便受けの整理をし、切れた電球を替え、ゴミ出しの曜日を間違えた老人にやんわりと教える。誰に何を頼まれても、いやな顔ひと

つせず、「いいのよ、それが仕事だから」と笑う。住人の誰もが「ほんと、いい管理人さんよね」と口を揃える、あの頼れる^{たたず}佇まい。

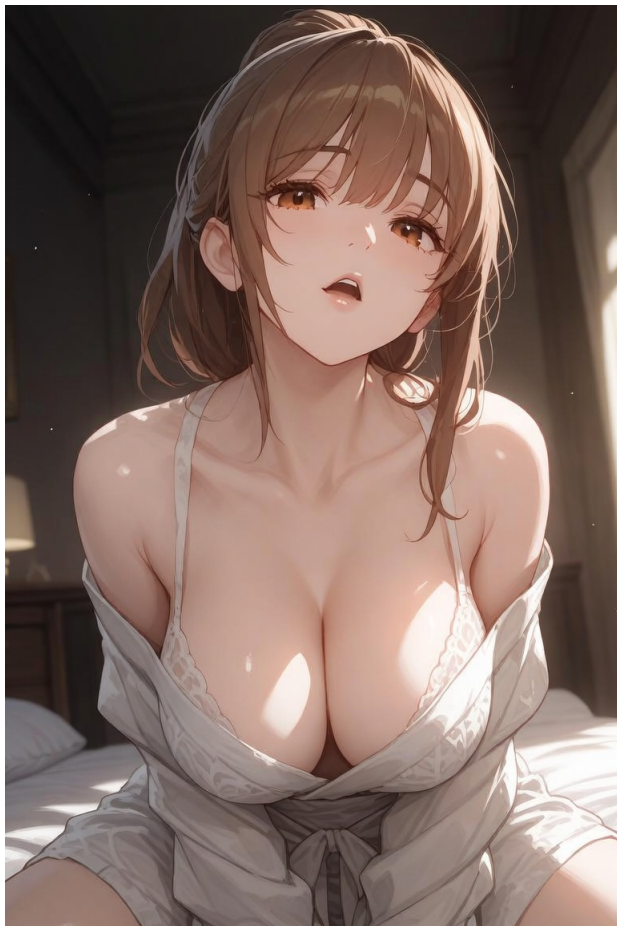
その同じ唇が、今は俺の名前だけを、溶けるように呼んでいる。

「……湊くん」

後ろでひとつに結われていたはずの栗色の髪が、今はほどけて、白い首筋に幾筋も乱れて貼りついていた。いつもは穏やかに細められている目もとが、今は潤んで、頼りなくこちらを見上げてくる。住人みんなの前では、決して見せない顔だった。

つばき荘の壁は薄い。隣の部屋の物音が、ときどき聞こえてくる。けれど今、この部屋に満ちている熱を、知る者は誰もいない。同じ屋根の下に眠る住人たちも、廊下の暗がりも、何ひとつ気づいていない。それでいい、と湊は思った。この夜は、二人だけのものだ。

それでも——俺だけが知っている。いつも誰かの世話を焼いてばかりのこの人が、たったひとり、誰にも甘えずに張りつめてきたことを。そして今、その人が、俺の腕のなかでだけ、何もまとわない女になっていることを。



——ここから先は製品版でお楽しみください——